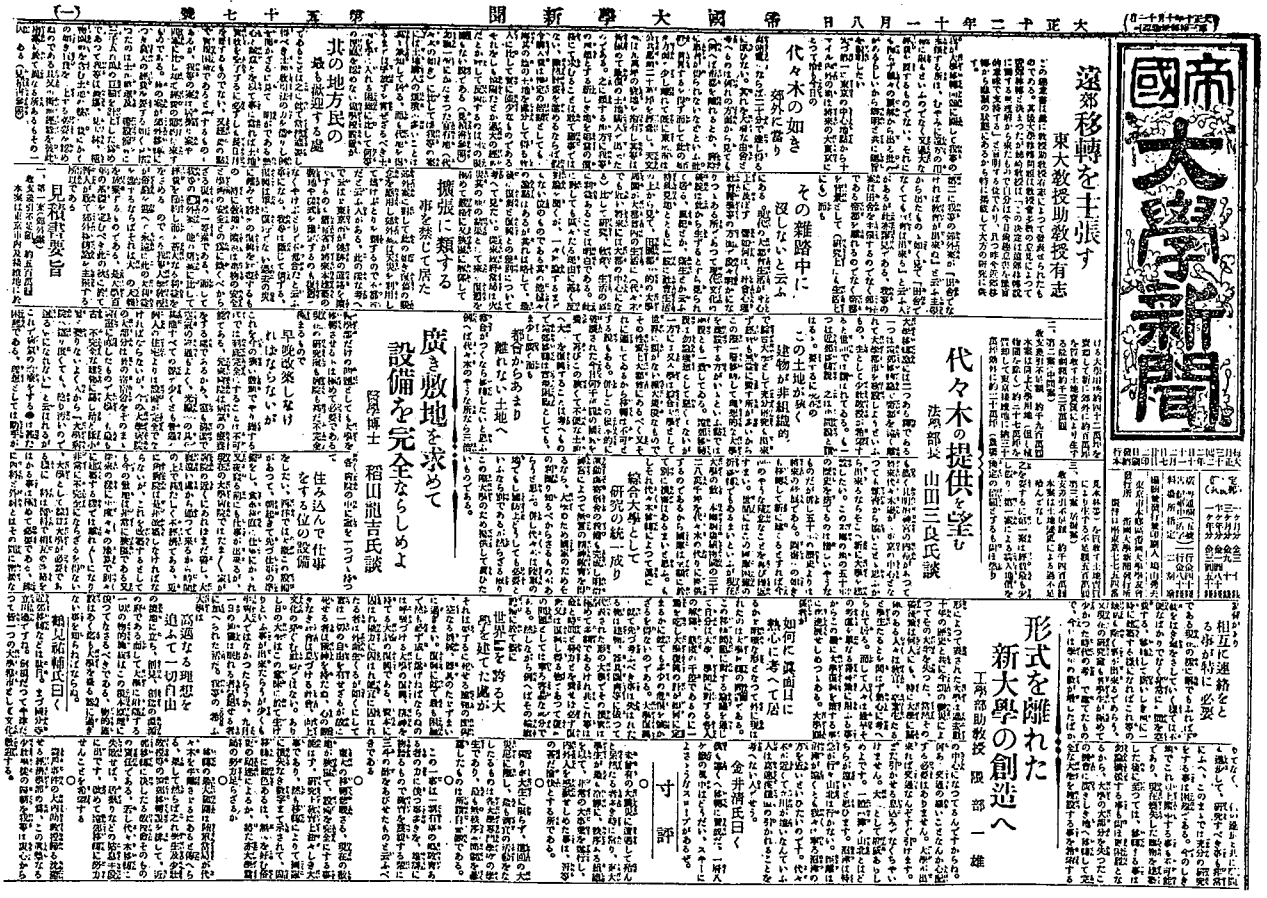
ISSN 0915-3284

東京大学史史料室ニュース

第14号　1995・3・31

目　次

キャンパス事情今むかし …… 2
大学史史料室 …… 3
達（たっし） …… 4
内田文書にみる在学中の出陣者数について …… 6
受贈図書一覧 …… 8
史料室日誌抄録 …… 10



帝國大學新聞

遠郊移轉を主張す
東大教授助教授有志

代々木の如き郊外に當り

その雜踏中に沒しないと云ふ

擴張に類する事を禁じて居た

廣き敷地を求めて設備を完全ならしめよ
理學博士　稲田祐吉氏談

代々木の提供を望む
法學部長　山田三良氏談

綜合大學として研究の統一成り

住み込んで仕事をする位の設備

高邁なる理想を追ふて一切白山

形式を離れた新大學の創造へ
工學部助教授　服部一雄

相互に連絡をとる事が特に必要

金井清氏曰く

寸評

関東大震災後のキャンパス移転問題を報じた記事
（『帝国大学新聞』大正12年11月8日付）

キャンパス事情今むかし

田中　学

最近、本郷キャンパスを歩いていると、あちこちで建築中の工事現場に出くわす。本郷、駒場の再開発と柏の新キャンパスを含めた三極構想が動きだしたので、こうした状態は当分つづくことであろう。

先頃農学部の林学科が中心になって行われた本郷キャンパスの樹木調査によると、10年ほど前には約6千本あった樹木が約4千本に減っていたそうである。たかだか10年ほどの間に2千本の樹木が失われたということは、それだけ急速にキャンパスの過密化が進んでいることを物語っている。

確かに、以前に較べれば学生定員も増えたし、大学院生も大幅に増加してキャンパス人口は膨張したし、理科系では種々の設備や装置などがしだいに大型化する傾向があるから、建物の増加は必然の成り行きではあった。しかし、そうはいってもキャンパスのスペースには自ずから限りがある。本郷にしろ駒場にしろ、伝統もあり愛着もあるけれど、どこかにゆったりとした新天地を求めたい、という気持ちがあっても不思議ではない。今回の新構想に本郷、駒場のほかに、柏という第三極が加わったのも多少そういう気持ちがはたらいていよう。

ところで、現在に較べればずっとゆとりがあったはずの時代にも、新キャンパスの夢がたびたび描かれていた。キャンパス内外での建物その他の新築や再配置、付属施設の新設や移転などは別に珍しくもないが、東大全体の引っ越しが具体的な候補地をあげて投票で決められたケースがある。

あの関東大震災で大打撃を受けた後の復興計画の過程のことである。『東京帝国大学五十年史』（下冊）はごく簡単にだがそのことにふれている。いわく「本学の復興に関して第一に起こるべき問題は、現在の場に於て復興を図るべきや、将た他の地をトして復興の計画を樹つべきやといふことなりとす」。この問題については、本郷で再建すべしという「現実派」と新天地を求めるべしという「理想派」が対立した。後者の主張は「本郷の地たるや逐年の拡張に伴ひ頗る狭隘を告げ来れることは、何人も否むことを得ざる事実なるが上に、総合大学と称し乍ら農学部独り離れて駒場に在り、総合の実を挙ぐるに不便少なからず」というものであった。

文面からも知られるように、新キャンパス構想と当時駒場にあった農学部の統合問題が絡んでおり、この主張の急先鋒は新進気鋭の農学部那須皓教授等であった。先の「東京大学百年史」編纂の際に那須教授から行った聴取りによると、教授らの構想は概略次のようなものであった。

当時、本郷キャンパス周辺の地価は1坪あたり2百円（ちなみにそれは当時の教授の月給1月分に相当したそうである）程度、それに対して三鷹駅から1キロ離れたあたりの地価は4円程度で、50倍ほどの違いがあった。したがって、本郷キャンパスの10万坪を売れば、100万坪以上の土地を取得することは容易であるばかりか、資金的には相当の余裕ができるはずであるし、これに政府の支出する復興予算を加えれば、例えばケンブリッジやオックスフォードのように、ゆったりした大学設備に、教官の宿舎、学生の居住区、さらに様々な共通施設などを含んだ理想的な研究学園都市が建設可能ではないか。というわけで、那須教授やその構想に共感した教官や学生が候補地を求めて手弁当で立川、八王子、青梅、千葉などを探索した結果、三鷹に落ち着いたようである。

この三鷹移転論に対しては、特に医学部と法学部からの反対が強かった。医学部の反対理由は「病院の患者を得るのに、そんな田舎のほうへ行ったら非常に不便だ」というものであった。

法学部の場合は、学生というのは「田舎の、空気のいい、社会的環境のいいところで(教育を一田中)やったら、一種の温室育ちの人間ができてしまう。学校を出て社会の荒波に放り込まれたとき、じきに病気に感染しちゃうぞ。東京のド真ん中にいてバチルスを吸っていればこそ抵抗力が得られるんだ」という教育論であった。

これらについての那須教授の反論は省略するが、結果的には大学全体の問題であるから教授、助教授全体の投票で決めようということになった。

当時の古在由直総長は農学部出身であったため、かえって両者のあいだに立って苦慮されたようである。

そうした事情に配慮してか、同じ農学部の別の教授から第三案として代々木の陸軍練兵場への移転が提案され、投票の結果は第一位となった。しかし、もとより陸軍への根回しがなされていたわけではないから、これは陸軍から一蹴され、再投票の結果本郷への居残りが決まり今日に至っている。

その後、現在の弥生キャンパスにあった一高と農学部駒場キャンパスの交換が成立し、昭和10年に農学部の本郷への移転・統合が実現したのである。

大学史史料室

藤森照信

史料というものを考える時、いつも念頭に姿を現わすのはモースである。もちろん本学の創草期の教授をつとめられ、進化論を紹介し、大森の貝塚を発見したモース。

彼には『日本の住い』という日本住宅史上の名著があり、そこに見られる克明な観察眼と博物学的な好奇心には心ひかれていたから、機会があったらピーボディ博物館を一度は訪れたいと思っていた。そして、十年ほど前にボストンに行った折り、ボストンの北方のセイラムの町に足をのばし、念願のピーボディ博物館を見学した。ピーボディは海事博物館で、モースのコレクションはその一部をなしているだけで、一度訪れたからといってコレクションのごく一部しか分からないのだが、それでも、江戸もしくは明治初期の金物屋や陶器屋の店先のミニチュアにはそれなりに感動した。こうしたミニチュアが既製品として売られていたのかモースが注文したのか知らないが、とにかく克明をきわめるのである。

しかしピーボディ訪問の中では〝史料〟という問題について格別考えさせられたわけではなかった。考えさせられたのは、そのしばらく後に日本で開かれたモース展の時だった。ピーボディのモース・コレクションの中の逸品が初の勢ぞろい。文字通りの史料の逸品だらけ。正確には、逸っせられた品だらけ。

泥のついたままのチビた下駄がある。おそらく履かれていた時期が正確に判明する日本初の下駄だろう。ついている泥も、時期の判明する日本初の路上の泥。封の切ってないヨーカンのカン詰めの切り口からは中味がにじみ出ていたし、ビンに詰った百年前の金平糖は怪しく光っている。

ふつう歴史の資料というと、残るべきものが残っているというか、同時代もしくはその後の時代の誰かが残すべきかどうかを判断した結果残ったというか、ようするにある価値感のフィルターを通った品のみが残っている。もちろんモースとて一つの価値感に基づいて残したにちがいないが、それにしても泥の付いた下駄は、ほとんどもうフィルターなしに近い。

価値感のフィルターなしに残ってしまった物品の迫真力、その想像喚起力に私はたまげてしまった。これこそ、歴史資料の理想的残り方ではないか。

とすれば次なるテーマは、そのような無フィルターの残し方はいかにして可能なのか。たとえば、一つの思考実験として、大学で日本史研究が現在いかに行なわれているかを資料として後世に残すことを考えてみよう。文学部の日本史の研究室にうかがい、「現在ここでどのように研究が行なわれているかを史料として残したいが協力してほしい」と、大学史の関係者が申し入れたとする。するとその部屋の先生は、研究の目的とか、使っている資料とか、研究会の様子とか、あれこれ紙に書き出してくれるだろう。しかし、それはその先生の研究実態のごく断片にすぎないし、書くという行為の過程で、厚いフィルターを何重にも通した結果にすぎない。嫌なことは書かないし、使っている資料も『歴史〇〇』というような歴史ファン向けの雑誌を参考にしていても伏せるだろう。見栄と体面があってこそ人間なのである。

しかし資料としてはそれでは困る。そこで次なる申し出として、「研究の実態を物証として後世に伝えるため、できるだけ今のままにして研究室を開け渡してほしい」と言ったとしよう。こうすれば、使っている資料などは丸ごと残りうるが、それでもあまりに個人的なもの、たとえばタバコとかアドレス帳とか手紙とか、飲みかけのウイスキーとかは持って出るにちがいない。

将来の歴史家はもしかしたら〝歴史研究とタバコ〟という研究テーマを持つかもしれないし、アドレス帳が〝歴史学者を取り巻く人間群像〟というテーマの役に立つかもしれない。将来の人間が過去のどんなディテールに関心を持つかはその時代の人には分からないのである。モースの泥付の下駄がその証人。

とすれば、大学史の関係者に残された手はただ一つ、ある日突然、日本史の研究室を訪れ、もし先生がいたらその場から退去していただき、いなかったらただちに窓とドアにビニールをかけて密閉し、窒素ガスを充満させる。こういう歴史保存行為を十年に一ペン、乱数表かなんかを使って秘かに選ばれた研究室に対し行なう。もちろん、保障は手厚くする。施設が更新されて喜ぶ先生だっているだろう。そして、百年したらガスを抜き、公開する。もし東京大学の創立の時からこうした歴史保存の努力がなされていたら、今ごろわれわれは、十年に一ぺん、百年前の大学の研究室へとタイム・スリップすることができる。フェノロサ教授の部屋なんかのぞけるかもしれないのである。

東大の記録管理（9）

達（たっし）

その8

大正初め以来、達番号をつけていなかったことは結局不便だったのだろう。起案文書の簿冊をみていくと、大正12年末から達に「乾第何号」という文書番号がつけられるようになり、結局昭和7年4月から、かつてのように達専用の「達第何号」という番号が復活する。

達に「乾」が現われたのは、調査の及んだ限りでは、大正12年12月10日付けの理学部学科課程改正であった。「乾第八九四号」という文書番号がつけられている。

「乾」という番号自体はずっと古く、明治22年（4月かららしい）から用いられている。「乾」という番号から想像がつくように、「坤」という番号と組合せとなっており、いずれも学外宛ての文書に用いられるもので、「乾」は文部大臣を初めとする文部省相手の文書に、「坤」は高等学校、軍学校、府県市町村など文部省以外の機関宛ての文書に用いられる。番号は、毎年年頭に第1号から始められる。但し大正初年には少しルールが崩れ、「乾」「坤」とも学外だけでなく、学内宛ての通知にも用いられるようになる。

では、達に、なぜ文部省相手の「乾」がつけられることになったのだろうか。それをこの「乾第八九四号」を例にみておくことにしよう。

改正は、大正12年11月13日付けで理学部から改正の上申があり、それを受けて、評議会で議決の後、本部庶務課で文部大臣宛ての伺いが起案され、総長の決裁を得て11月19日付けで文部大臣に宛てて送達された。文部省相手の「乾第八九四号」は、そもそもその時につけられた番号だった。894という数字は、大正12年のこの時点までに文部省と往復した文書が既に893件あったことを示している。

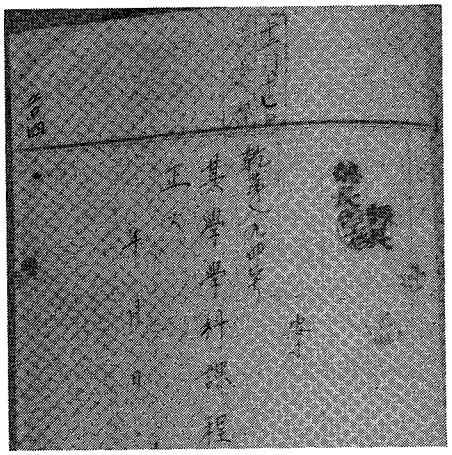


図10　大正12年達「乾第八九四号」の起案文書
『検印録』より

その「乾第八九四号」という番号が達にもつけらたのは、それが当時の文書管理の方法だったかららしい。伺いが12月10日付けで文部大臣から許可されると、許可を記す文書が12月12日に東京帝大に届けられる。本部庶務課では受領した文書に受付け印を押し、総長らへ供閲に付す訳だが、文部省側でつけてきた番号のほかに、伺いの文書につけたのと同じ「乾第八九四号」という番号を書込んでいる。そして同じ日、達を起案し、総長の決裁を得た後、図10のように、また同じ「乾第八九四号」の番号をつけたのである。同じ1件の書類の整理の便宜のためとみられる。こうして文部省相手の「乾」が達にも及んできたわけである。

こんなふうに番号がつけられていたので、達には「坤」の番号が用いられる場合も出てくる。大正14年4月21日起案、4月23日送達済みの「大学一般」宛て達は、「靖国神社臨時大祭ニ付賜暇ノ件内閣告示第一号ニ基キ本学ニ於テハ本日二十八日ヲ以テ休暇ト定ム　年　月　日　　総長」というものだが、図11のように「坤第三〇二号」という番号がつけられている。これは文部省との往復によらない達だからである。

では、番号システムが再開されたきっかけは何だったのだろうか。考えられるのは事務の責任者の交代である。この頃から起案文書に書記官西山政猪の印が見られるようになるからだが、もっともそういう状況証拠以上のものは存在しておらず、単に多少可能性の高い憶測にすぎない。

こうしてつけられ始めた「乾」「坤」という番号だが、少なくとも「乾」の方は間もなく「文第何号」という番号に変更され（「坤」未詳）、さらにその後「坤」も含めて「庶第何号」という番号に変更され、そしてついに昭和7年には「達第何号」という番号が復活することになる。

「乾」が「文」に切換わったのは、大正14年5月中旬から下旬にかけてであった。その時点はいまのところ特定できていないが、その結果、大正14年3月31日付けの農学部附属農場教員養成所規則中改正は、5月13日（3月30日付け）送達の文部大臣への伺いに「乾第三五八号」という番号がつけられており、6月9日に（3月31日付け）東京帝大が受領した許可の文書には「文第三五八号」という番号が記入されている。つまり「乾」が文部省を現わす「文」に機械的に切換わっただけである。そして、6月9日起案、6月13日付け送達済み（文面上の日付けは3月末日付け）で発せられた達にも「文第三五八号」がつけられたわけである。

達に「庶第何号」という番号が見られるようになるのは、大正15年5月のものからで、すでに用いられていた庶務課が学内と往復する文書の番号が適用されたものと見られる。そのシステムを、大正15年5月13日

付けの農学部学科課程中改正で確認しておこう。

まず、農学部から改正を上申された文書は本部で「庶第七六八号」として受付けられ、次に文部大臣への伺い文書とその許可文書とには同じ「文第二八〇号」という番号がつけられ、それを受けて改正の達が発せられるときは図12のように新たに「庶第八二九号」という番号がつけられている。但しここではつけられた「庶」の番号が異なっているが、通常は同一である。

「庶」のシステムは、その後「文」の番号が、昭和3年9月末か10月初めに廃止されたことから、少しだけ変更される。昭和3年11月17日付け改正の「農学部実科規則中改正」は、本部が、農学部から受けた文書に書込まれた番号が「庶四、〇〇七号」で、その後、文部大臣への伺いにも、その許可文書にも、そしてその達にも同じ番号が書込まれている。「文」の廃止にともない、すべて「庶」になったわけである。なお、「文」の廃止のきっかけも明らかでないが、庶務課長が菊沢季麿から9月28日に着任した江口重国に交替していることも関係があるのかもしれない。

こうして、学内規則の公布式を一般の文書の範疇でまとめる「庶」がしばらく用いられていたが、それでもやはり不便だったのではないだろうか。昭和7年4月から「達第何号」という番号が復活した。

「達第一号」の番号がつけられたのは、昭和7年3月31日付けの改正の学部通則中改正である。但し許可文書は3月31日付けであるが、東京帝大に届いたのが4月5日、従って達の起案も4月5日、しかし送達日も4月5日だが、決裁は4月8日となっている。このようによくわからない部分もあるが、どうやら4月に入って以降に起案された達に達専用の番号が復活したものらしい。

但し、この達が4月中に発せられたからといって、実際に4月から達番号のシステムが変化したかについては疑問が残る。図13に見えるように、最初、番号記入欄に「庶第四九三号」という番号がインクで記入されており、あとから鉛筆で「達第一号」に書き直されているのである。「庶第四九三号」の番号は、文部大臣宛て伺いに用いられたのと同じ番号である。その後、6月30日付けの学部通則中改正も、最初「庶第一、三四二号」という番号が与えられており、インク消しで消した上から「達第五号」の番号が記入されている。

いつかは特定できないが、ある時点で遡って、番号を「達第何号」と改めたように思われる。(以下次号)

(群馬大学教育学部助教授　所澤　潤)

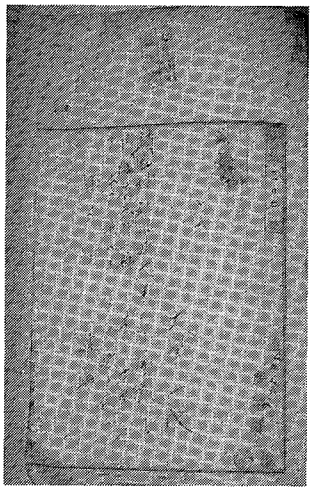


図11　「坤」の番号がついた達の起案文書
『検印録』より

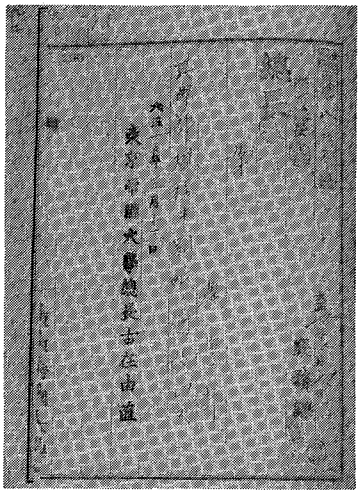


図12　「庶」の番号がついた達起案文書
『文部大臣准允』より

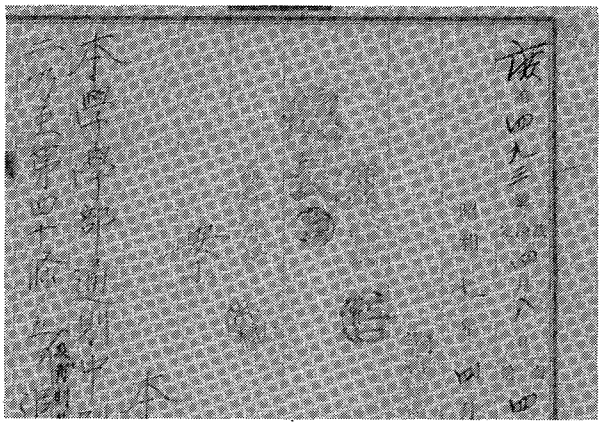


図13　鉛筆で書加えられた昭和7年の「達第一号」
『諸規則制定関係』より

内田文書にみる在学中の出陣者数について

高　橋　陽　一

本誌第13号で現在調査中の東京帝国大学在学・卒業の戦没者調査について報告した。その後も関係各位のご協力により、多くの高等学校や旧陸海軍関係団体の名簿や調査のご報告が寄せられ、戦没者のデータの集計作業がすすんでいる。今回は同時にすすめられている学徒出陣者（陸海軍への入営・入団者）数の調査について報告し、内田祥三文書にみられるデータの概略を紹介したい。

【人数確定の難しさ】

全体としての入営・入団者の人数は、現在までの作業によっても判明していない。『東京大学百年史　通史二』は、1943（昭和18）年12月31日現在の東京帝大の入営による休学者を2884人とする数字を掲載しているが、それ以上の詳細なデータは記述されていない。また陸軍学徒兵の資料編纂委員会による『検証・陸軍学徒兵の資料』(1993年）は、各種資料や出版物に示された全国の学徒出陣者数を詳細に検討して、その検証の困難さを提示している。

東京帝大在学中に入営・入団をした者の人数を確認するには、各学部の休学に関する数値を集計するのがもっとも確実な方法であろう。しかし、学籍に関する書類からある時点の入営・入団者数を集計する場合、入営・入団の年月日と、復学の年月日を確認しなくてはならない。そして入営・入団と復学は別個の届けになるために、同一人物を確定する作業が必要となり、手間がかかることになる。このため、比較的に入営・入団者が少ない理学部・工学部については、すでに集計したが、大量の対象者がいる文科系学部では、非常に困難である。

【内田祥三文書のデータ】

こうしたなかで、1943（昭和18）年３月より45年12月まで総長をつとめた内田祥三の文書に含まれているデータは貴重である。このうち、兵役による在学生の休学者の統計が記載されているのは、1943（昭和18）年７月の『厳秘　東京帝国大学概況書』（『雑　参考資料　昭和十八年　其一』に綴込)、1944（昭和19）年２月の「昭和十八年十二月三十一日現在本学学生生徒在籍者数調」（『雑　参考資料　昭和十八年　其二』に綴込)、1944（昭和19）年９月の『厳秘　東京帝国大学概況書』（『雑　参考資料　昭和十九年　其一』に綴込）である。この三つのデータにより、1943年６月30日現在（但し在籍者数は５月１日現在)、同年12月31日現在、1944年８月1日現在(ただし大学院学生は５月１日現在）の３つの年月日現在のデータがわかる。一つめと二つめの間には、在学中の徴集延期がなくなり文科系学生が多数応召した1943年12月はじめの入営・入団

図表１　東京帝国大学の入営・入団者総数

単位：人　比率は％

種別	学部	43年6月 在籍	43年6月 応召	43年6月 入営	43年6月 合計	43年6月 比率	43年12月 在籍	43年12月 入営	43年12月 比率	44年8月 在籍	44年8月 入営	44年8月 比率
学部	法学部	2,195	17	47	64	2.91	2,161	1,382	63.95	2,145	1,433	66.80
	医学部	657	1	5	6	0.91	651	7	1.07	651	7	1.07
	第一工学部	1,202	5	11	16	1.33	1.289	32	2.48	1,281	32	2.49
	文学部	1,110	25	17	42	3.78	1,204	391	32.47	1,179	648	54.96
	理学部	426	0	5	5	1.17	455	13	2.85	454	12	2.64
	農学部	614	10	11	21	3.42	636	134	21.06	630	162	25.71
	経済学部	1,134	6	12	18	1.58	1,193	761	63.78	1,193	846	70.91
	第二工学部	847	0	5	5	0.59	1,266	13	1.02	1,265	17	1.34
	合計	8,185	64	113	177	2.16	8,855	2,733	30.86	8,798	3,157	35.88
大学院	法学部	29	2	1	3	10.34	55	4	7.27	52	5	9.61
	医学部	30	5	0	5	16.66	40	5	12.50	35	5	14.28
	第一工学部	40	1	20	21	52.50	59	25	42.37	59	23	38.98
	文学部	154	38	10	48	31.16	204	55	26.96	189	52	27.51
	理学部	52	3	27	30	57.69	86	49	56.97	82	52	63.41
	農学部	28	3	3	6	21.42	49	8	16.32	41	9	21.95
	経済学部	10	1	1	2	20.00	22	2	9.09	21	1	4.76
	第二工学部	0	0	0	0	0.00	8	0	0.00	8	0	0.00
	合計	343	53	62	115	33.52	523	148	28.29	487	147	30.18
総計		8,528	117	175	292	3.42	9,378	2,881	30.72	9,285	3,304	35.58

1943年12月のデータでは、朝鮮人学生12人と台湾人学生１人の入営（ともに経済学部）を内数として注記している。

があるので、この間の変化をみることができる。

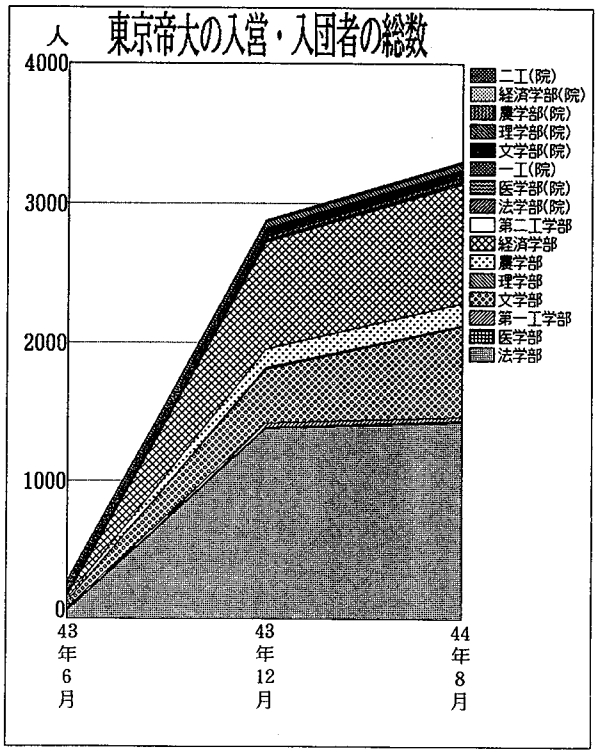
これから作成したデータが**図表1**である。また人数について作成したグラフが**図表2**である。1943年6月については、「応召休学」と「入営休学」とに区別されているが、その後は「入営」、「入営応召休学」に統合されている。なお、1943年12月現在の表では、「尚本表ノ外ニ入営又ハ入団シタルモノニシテ休学ノ手続ヲ経ザル者若干アル見込ナリ」と休学手続きがまだの者を含んでいない旨を注記している。

在籍者に対する入営・入団者の割合は、学部学生について**図表3**に、大学院学生について**図表4**に示した。学部学生では、文科系学生の在籍のままの応召が一般的になった1943年12月に大幅に比率が上がる。学部でみると、法学部と経済学部で7割、文学部で5割の学生が出陣したことになり、理系では基本的に徴兵が延期されているものの、猶予の対象から外された農業経済学科などをもつ農学部では2割が出陣していることがわかる。それ以外の理系学部では、1～2％である。

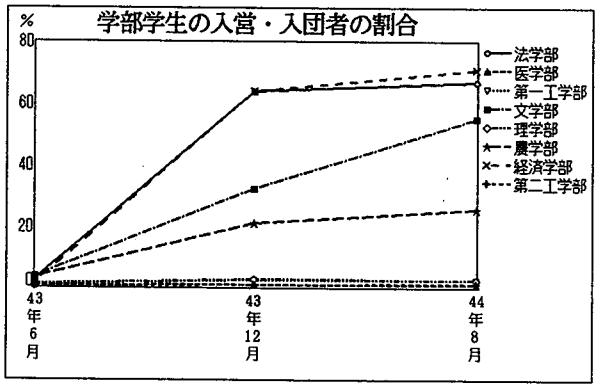
なお、文学部学生の1943年12月現在の入営・入団者を名簿から算出した東大十八史会のデータでは、696人で全体の59.1％となっており（東大十八史会『学徒出陣の記録』1968年）、391人で32.5％となる本データと倍近い差がある。これは、内田文書が翌年2月の速報値で、入営・入団後に学生が提出する休学届けの遅れを反映したものであろう。また、同じ文科系でも法学部・経済学部と比べて文学部の割合が低いのは、法学部・経済学部には海軍主計科などの優遇されたコースが用意され、志願による入営・入団が多かったことも関係しているだろう。

大学院生については、1943年6月には約3割の比率の入営・入団者があったが、同年から新設された特別研究生のみが徴兵延期されるようになる。しかし、この特別研究生に1943年の第1回で111名、第2回では理科系のみ88名もの人数が採用されたため、1943年12月以降の入営・入団者の比率の変化は顕著ではなく、むしろ低下している。このあたりの事情はさらに調査する必要があろう。

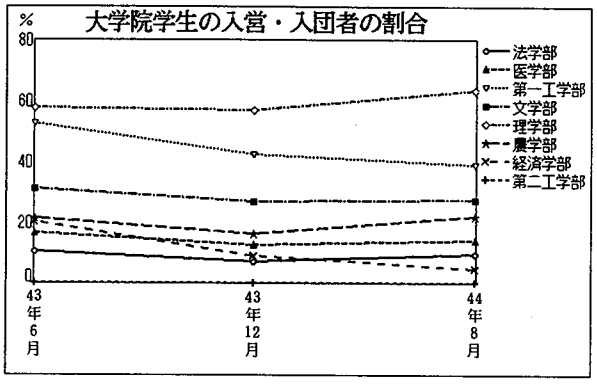
図表2



図表3



図表4



受贈図書一覧（平成４年３月～４年11月）

法律学の夜明けと法政大学
　同大学　平成４年３月
埼玉県行政文書件名目録　土木編II
　同県　平成４年３月
所蔵文書目録第31集　橋本明氏収集文書目録
　埼玉県立文書館　平成４年３月
埼玉県行政文書総目録　出先機関編Ｉ
　同県　平成４年３月
近代日本研究　第８巻
　慶応義塾福沢研究センター　平成４年３月
一宮市博物館年報(2)
　同博物館　平成４年３月
サティア《あるがまま》第７号
　東洋大学　平成４年７月
銀杏　第４号
　銀杏会　平成４年７月
汲古　第21号
　汲古書院　平成４年６月
井上円了センター年報　第１号
　東洋大学　平成４年３月
関西大学百年史通史編下巻
　同大学　平成４年３月
神奈川大学評論　第12号
　同大学広報委員会　平成４年７月
沼津市明治史料館史料目録12　平沢区有文書目録
　同史料館　平成４年７月
江原素六生誕百五十年記念誌
　沼津市明治史料館　平成４年７月
横浜市史料所在目録―補遺編２―
　横浜開港資料館　平成４年３月
野間教育研究所所蔵学校沿革史誌目録
　同研究所　平成４年３月
教育学部教育学科年報Ｉ
　同学部　平成４年10月
沼津・室賀病院
　室賀定信　平成４年８月
中央大学百年史編集ニュース第18号
　同大学　平成４年６月
中央大学史資料集第10集
　同大学　平成４年４月
早稲田大学史紀要　第24巻
　同大学　平成４年３月
サティア《あるがまま》第８号
　東洋大学　平成４年10月
戦前学生の食生活事情
　上村行世　平成４年11月
宇宙科学研究所年次要覧　平成３年度
　同研究所　平成４年
名古屋大学史紀要　第３号
　同大学史編集室　平成４年９月
日本教育史基本文献・史料叢書11
　寺崎昌男ほか　平成４年２月
文書館紀要　第６号
　埼玉県立文書館　平成４年７月
埼玉県立文書館増加図書目録
　同文書館　平成４年７月
伝染病研究所
　小高　健　平成４年11月
図録東海大学50年
　同大学　平成４年11月
近代日本研究資料(4)石川幹明論説目録
　慶応義塾福沢研究センター　平成４年11月
神奈川大学評論　第13号
　同大学　平成４年11月
大学教育研究センター所蔵図書目録
　広島大学大学教育研究センター　平成４年11月
高等教育改革の新段階
　広島大学大学教育研究センター　平成４年11月
大学教育研究センター20年の歩み
　広島大学大学教育研究センター　平成４年10月
アメリカの大学院評価
　広島大学大学教育研究センター　平成４年10月
北海道立文書館史料集第８　申奏録(二)明治８年７月～明治９年
　同文書館　平成４年11月
北海道立文書館所蔵資料目録　北海道国有未開地処分法完結文書(6)
　同文書館　平成４年９月
プロムナード東京大学史
　寺崎昌男　平成４年12月
東京大学現状と課題Ｉ
　同大学　平成４年12月
川中家文書目録　近代の部
　大阪府公文書館　平成４年３月
川中家文書目録　近世の部
　大阪府公文書館　昭和63年３月
月刊文献ジャーナル第31巻第12号
　富士短期大学　平成４年３月
横浜開港資料館紀要第10号
　同資料館　平成４年３月
明治大学百年史第３巻通史編Ｉ
　同大学　平成４年10月
サティア《あるがまま》第９号
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成５年１月

受贈図書一覧（平成４年11月～５年７月）

九州大学75年史通史
　同大学　平成４年３月
九州大学75年史別巻
　同大学　平成４年３月
成瀬記念館1992№８
　日本女子大学成瀬記念館　平成４年12月
沼津市明治史料館史料目録13　岡一色・西沢田区有文書目録
　同史料館　平成４年12月
追悼集Ⅳ―同志社人物誌　昭和10年～昭和12年
　同志社社史資料室　平成５年１月
富士論叢　第37巻第１号
　富士短期大学学術研究会　平成４年５月
伝染病研究所・医科学研究所の100年
　医科学研究所　平成４年11月
収蔵文書目録第５集　諸家文書目録２
　千葉県文書館　平成４年３月
学校法人日本体育会百年史
　同体育会　平成３年10月
戦後教育改革資料11　石川二郎旧蔵資料目録稿　森戸辰男関係文書目録稿
　国立教育研究所　平成４年３月
米国対日教育使節団に関する総合的研究
　国立教育研究所　平成３年３月
中央大学百年史編集ニュース第19号
　中央大学　平成５年３月
適塾　第25号
　適塾記念会　平成４年12月
九州大学大学史料叢書第１号
　同大学史料室　平成５年３月
伊藤隆先生　年譜・著作目録
　伊藤隆先生還暦記念会　平成５年４月
日本近代史―研究と教育
　伊藤隆　平成５年１月
サティア《あるがまま》第10号
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成５年４月
学士会百年史
　学士会百年史編集委員会　平成３年３月
法政大学史資料集　第16集
　同大学　平成５年３月
東京芸術大学百年史　東京美術学校編第２巻
　同大学　平成４年８月
明治学院大学要覧　文学部
　同大学　平成５年４月
明治学院大学要覧　法学部
　同大学　平成５年４月
神奈川大学評論　第14号
　同大学　平成５年３月
北海道立文書館研究紀要　第８号
　同文書館　平成５年３月
日本地震史料　続補遺
　都司嘉宜　平成５年３月
大阪外国語大学70年史
　同大学　平成４年11月
同志社談叢
　同大学　平成５年３月
沼津市明治史料館史料目録14　木瀬川大古田家・中石田秋元家文書目録
　同史料館　平成５年３月
沼津市博物館紀要17
　沼津市歴史民俗資料館　平成５年３月
ぬまづ江戸時代図誌
　沼津市明治史料館　平成５年３月
富士論叢　第37巻第２号
　富士短期大学学術研究会　平成４年11月
大学論集　第22集
　広島大学大学教育研究センター　平成５年３月
市民大学に関する調査研究
　広島大学大学教育研究センター　平成５年３月
大学自己評価への模索
　広島大学大学教育研究センター　平成５年３月
イギリス近代社会と高等教育
　広島大学大学教育研究センター　平成５年３月
大学評価と大学教授職
　広島大学大学教育研究センター　平成５年３月
近代日本研究　第９巻
　慶応義塾福沢研究センター　平成５年３月
野間教育研究所紀要　第36集　配属将校制度成立史の研究
　同研究所　平成５年３月
入学試験の制度及び試験問題の分析に基づく近代日本の学力の歴史的研究
　所澤潤　平成５年３月
東京芸術大学百年史　演奏会編第２巻
　同大学　平成５年４月
早稲田大学百年史　第４巻
　同大学　平成４年３月
筑波大学日本教育史研究年報　第２号
　同大学日本教育史研究室　平成５年４月
神戸大学史紀要　第３号
　同大学百年史編纂室　平成５年３月
研究成果報告書　留学システムに関する国際・比較教育学的研究
　所澤潤　平成５年３月
戦後教育史研究　第９号
　明星大学　平成５年６月
サティア《あるがまま》第11号
　東洋大学井上円了記念学術センター　平成５年７月

史料室日誌抄録（平成６年９月～平成７年２月）

10．4 火～10.6木　九州大学へ学徒動員・学徒出陣の調査のため出張。

10.20 木　総長に昨年度までの学徒動員・学徒出陣調査について中間報告提出。

10.25 火　学部長会議において昨年度の学徒動員・学徒出陣調査について説明。

11.29 火～12.1木　東北大学へ学徒動員・学徒出陣の調査のため出張。

11.30 水　『東京大学史史料室ニュース』第13号発行。

12.15 木　第38回東京大学史料の保存に関する委員会開催。平成７年度東京大学史史料室予算について審議。

1.23 月　大学史編纂参考のため学習院大学より１名来室見学。

2.13 月　厚生省社会・援護局へ学徒動員・学徒出陣の資料調査。

2.14 火　展示会準備のため立命館大学から２名来室見学。

2.16 木　史料室保管『文部省往復』のマイクロ化のため昭和23年よりマイクロ撮影開始。

この間の閲覧者数

学内者　4名

学外者　41名

主な学外閲覧者所属機関

群馬大学、日本大学、学習院大学、香川大学、京都大学、野球体育博物館、広島大学

文献撮影・複写許可件数　6件

調査（照会）件数　35件

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第14号

発行日：1995年３月31日（年２回刊）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷７－３－１

電話（3812）2111 内線2036

印刷所：よしみ工産株式会社

北九州市戸畑区天神１—13—５

Archives Section of the University of Tokyo